平和

小学校高学年　中学校　高校
社会　総合

NHKスペシャル　49分　（2015年放送）

“あの子”を訪ねて
～長崎・山里小　被爆児童の70年～

この番組の良さ

原爆は被爆者に何をもたらしたのか

長崎市の山里小学校は、原爆で児童1300人が命を落としました。奇跡的に生き残った37人の手記は永井隆博士によって『原子雲の下に生きて』として出版され、彼らは「あの子」と呼ばれて平和への願いの象徴とされてきました。その37人をNHKは継続取材し、2015年にも18人に会うことができました。被爆したことを周囲に話せずひっそりと生きる人。家族の一言に深く傷ついた人…。「戦争よりも戦後がつらかった」と語る被爆者の70年を描きます。

生き残った「あの子」らが思うのは…

被爆者であるという苦しみ、原爆の悲惨さを伝える難しさ。「原爆で人生がめちゃくちゃにされた」「戦争よりも戦後が苦しかった」「平和であるためには原爆のことを後世に伝えていかなくてはならない」など、戦後70年という歳月を生き抜いてきた被爆者の葛藤を聞くことができます。

番組活用のポイント

原爆の恐ろしさを被爆後の苦悩の数々から知る

永井博士の残した手記『原子雲の下に生きて』は、原爆を体験し奇跡的に生き残った37人の子供たちによるものです。「ぼくの手はすっかり焼け、皮がなくなって、赤い肉が出ていた」「一面に血が流れていて、その中に、母のすっかり変わった顔がありました」など、当時の長崎で起こったことを生々しく書いています。NHKはこれらの被爆者を継続的に取材してきました。今回再び彼らを訪ねて見えてきたのは、70年たっても癒やされることのない原爆の傷痕でした。手記から原爆の恐ろしさが伝わり、被爆者の70年の人生に耳を傾けることで、被爆がそれぞれの人生にもたらしたものを感じることができます。

グループ協議で被爆者の苦悩について理解が深まる

番組視聴前に前提として、長崎の原爆について、基本的な事実を伝えます。視聴後にグループで話し合い、心が揺さぶられたことや、原爆の恐ろしさを確認します。グループ活動の時間を十分にとることで、被爆者の心に寄り添うことができるようにします。

修学旅行や平和学習などの教材として

長崎の平和教育に際しては、原爆投下と永井博士は学ぶ教材として欠かせないものです。原爆に関する長崎市の施設や永井博士の作品に触れることで、原爆の恐ろしさや平和の大切さを実感できます。他にも長崎や広島、沖縄に関する平和教育の映像資料から、真の平和を考える授業を組み立てることができます。

学習展開例　対象校種：高校　授業時間 50分

執筆者
宮古島市立
下地中学校
教諭　座間味浩二

被爆者の心に寄り添い 原爆の恐ろしさと被爆者の苦悩を知ろう

時間配分	学習活動	教師の支援
5分	①長崎の原爆投下についての説明を聞く。	○原爆に関する他の映像を視聴しておいて、投下の日時や場所、被害などについて詳しく説明する。
24分	②メモを取りながら番組を視聴する。 視聴 TV 原爆の悲劇を忘れないために建てられた「あの子らの碑」。 （開始～6分55秒） 38年間被爆者の養護施設「原爆ホーム」で過ごしてきた山崎千鶴代さん。 （6分55秒～15分19秒） 子供のために懸命に生きてきた難波美智子さん。 （15分19秒～20分26秒） 被爆体験を語ってほしくないと妻からいわれている深堀輝行さん。 （20分26秒～24分4秒）	○必要に応じてメモをとらせながら、番組を部分視聴させる。 ○被爆後の苦悩を語る3人のエピソードをポイントとしてとらえていく。
21分	③被爆者の苦悩について、感じたことや考えたことを話し合う。 ④「原爆は何をもたらすのか」ということを発表する。	○被爆者にはどういう苦悩があったのか話し合わせる。 ・山崎さんは、弱視とてんかんの発作で仕事を辞めさせられ、頼るあてもなく35歳で原爆ホームにやってきた。 ・難波さんは、50歳を過ぎ、長男から「一緒に住もう」といわれたが、「被爆したことは話さないでくれ」と頼まれた。「それが一番つらかった」という。 ・深堀さんは、被爆者である自分を妻が支えてくれた。孫が生まれた際に、「家の外で原爆の話をしないでほしい」と言われた。「つらくはないけど寂しいね」と語る。 ○原爆とはどういうものかを考えさせる。